CS02-2　6年制薬剤師教育に対する病院薬剤師としての考え、取り組み、期待

◯堀内　龍也[1]
[1]日本病院薬剤師会

長期実務実習を目前に控えて、薬剤師の６年制教育が山場にさしかかっている。あと２年たつと新しい教育を受けた薬剤師が医療の現場に出てくるわけである。薬剤師は病院・診療所及び保険薬局で働く薬剤師も医療従事者として位置づけられており、新しい薬剤師は我々病院で働く薬剤師のみでなく、医師を始め医療関係者が挙って期待している。

このような大きな期待のなかで行われている教育には、乗り越えなければならない山が累々としている。病院薬剤師の立場で６年制教育に対する期待と問題点、取り組みについて整理し、大学と医療現場、保険薬局間で充分な連携をして６年制教育が成果をあげる道を議論したい。

１）６年制教育と６年制教育を受けた薬剤師に対する期待

「何故に薬学教育を６年制に変えたのか」という原点に常に関係者は立ち戻る必要がある。薬物療法に責任を持つ医療人の養成をどのように行うかが鍵になる。薬についての充分な知識は勿論、疾病やその治療方法、人体の生理、構造、生体の制御機構の個体から分子レベルまでの最新知識の理解、さらには医療人としての倫理、医療安全に対する真摯な姿勢と技術・知識の習得、人間性の習得など医療現場で求められている課題の習得が求められる。医療崩壊の危機にある日本の医療現場では、薬に関することはすべて薬剤師にやってほしいという強い要望がある。これにどれだけ薬剤師が応え、責任をとるかが問われている事を教育関係者は認識すべきである。

２）どのような教育がされるべきか

最近の医療は、病院・診療所においても在宅医療においても、医師、薬剤師、看護師などそれぞれの専門家集団が患者や家族を中心として「チーム医療」で行われることが多い。チーム医療はチームのメンバーが治療方針と患者の状況を充分に共有化していることが前提となる。チーム医療は「コミュニケーション医療」である。コミュニケーション力や患者に接して信頼を得ることは、これまでの薬剤師にとって最も不得手とする部分であった。この問題をどのように習得させるかは大きな問題である。教育の中で実際に病める人たちに直接接し、治療に携わる医師や看護婦、クラークなど様々な職種の医療従事者と接する教育が重要である。大学でこれらの問題を教育するとともに、長期病院実習の中で最も養えるのではなかろうか。また、疾病とその薬物療法、医療安全の担い手として位置づけられる薬剤師が薬物の有効性を確認して、副作用をモニタリングするための技術、バイタルサインやフィジカルアセスメントなど身体のサインの意味とチェック技術を習得することも必須である。

３）病院における長期実務実習

新しい薬剤師教育のなかで、病院における実習は、薬学生に病院における薬剤師の業務を実感させ、多くの患者に直接接して、患者と悩みを共有化することを経験させることまで行うべきである。そしてその後の学習の目的の明確化とインセンティブを付与することが重要である。医療現場は様々である。様々な目的と規模の医療機関があり、薬剤師の役割も多様である。それらを経験するために積極的なグループ実習により多様な経験をすることが望ましいと考える。どの実習病院でも薬剤師はより良い実習のために最善の努力をすることを確信している。